

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：シン エヴァンゲリオン 劇場版

その6

今回のテーマ

シンジの心の喪失と再生について考えていく

前回のおさらい

エヴァンゲリオン Q においては、シンジがこれまで経験してきた相次ぐ喪失からニアサードインパクトの引き起こしてしまう。ことの重大さにシンジは強い衝撃を受け、それを受け入れられず、もがき苦しむ中、すがる思いでロンギヌスの槍を抜き、それがフォースインパクトの引き金をひいてしまい、より事態を悪化させてしまう。

シンジはその強い絶望、取り返しのつかない様な罪悪感の中で身動きが取れず、なにか、もぬけの殻のような状態になってしまう。

今回のシン・エヴァンゲリオン 劇場版は、そうなったシンジの喪失に伴う心の再生と成長を描いているように感じられる。

そしてこの心性が思春期の人々の心の揺れ動き、喪失感それと同時に希望と再生という点で非常に似通っているものを感じる

喪失という観点でボウルビィの悲哀の心理過程を説明した。

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

破の最後（アスカを自らのエヴァで殺めてしまう部分から） Q 全体にかけて、

①と②を何度も繰り返している様に見える。例えば、破の綾波を助け出そうとする行為は②の使徒への怒りであり、否認に伴う躁的防衛である。そして Q でカヲルにニアサードインパクトの現実を突きつけられ、冬月にシンジの母ユイ、そして綾波の真実を伝えられた際、①の状態になり、ロンギヌスの槍を抜く作戦のとき②の状態となり繰り返されている。

Q の最後でシンジは、取り返しのつかない様な罪悪感の中でもぬけの殻の様な状態になったが、それは妄想分裂ポジションに戻ることも抑うつポジションに進むこともできない。どちらの心性にもいくことができず、絶望の中で一人苦しんでいる状態であると。

→シン・エヴァンゲリオン 劇場版 (以下 シン・エヴァと略) の冒頭のシンジは、③の段階にある様に見える。

そこでシンジの心の成熟を進めていく (③→④の移行 または抑うつポジションへの移行) には、シンジ自身を受け止め、抱える環境が必要不可欠である。

2. シンジが目を覚ました時、周囲の状況はどのような反応であったか？

(Qと同じテーマ)

絶望に打ちのめされていたシンジが目を覚ますと、白衣姿のトウジを始め、皆が心配そうに接し、周囲の人々もシンジを温かく迎え入れる。その後、トウジの家では皆が食事を食べたり、お酒を飲んだりして和気藹々としていたが、シンジは部屋の片隅で一人離れた状態で両膝を抱え込んだままうずくまっていた。しかし、皆シンジの存在を気にかけていた。

その背景が襖や障子があって簡易なテーブルに畳、裸電球と昭和の時代を彷彿とさせるが、周囲の人々の関係性も非常に密な感じで、強い絆を感じさせる。

その食事会でトウジの義父はシンジが食事を摂らないことに怒鳴り出すが、それはシンジのことを考え、社会で関わっていくために大切な術を論しているようにも感じられる（穏やかな超自我とも捉えられる。cf ゲンドウ：強烈な超自我）。その様に殻に閉じこもっていたシンジを皆が寄り添い、受け止め、心配している様に感じられた。

その点を Q と比較すると、Q では冒頭部ではミサトをはじめとする WILLE の人たちは殺伐とした雰囲気です。シンジを「みそっかす」扱いし、主体性が剥ぎ取られ、彼の存在を受け入れられていない空間となっていた。この点において対照的である。

cf 離乳食と質素だけれども暖かみのある食事

1) シンジが覚醒後、アスカとの対面そしてその後のシンジとのやりとり

シンジは覚醒後初めてアスカに対面する。しかしそこでもシンジは依然もぬけの殻の様な状況で、食べ物も食べず、ほとんど動けず、終日横になっている状況で、うつ病の極期のような状況に似た状態となっている。そして何もしないで横になっているシンジにアスカは非常に怒りを感じている。

まだ心が未成熟なアスカはその様なシンジを受け入れられないでいる。そのことに加えてシンジのパッシブアグレッシブ(受動的攻撃行動)に巻き込まれ、

シンジに対して非常に怒りを感じ、直接的にぶつけてしまう。

(受動的攻撃的コミュニケーションの根底にあるのは、直接的な衝突に対する恐怖心・回避したい気持ち、無力感、不安である)

それゆえ、シンジとアスカの関係はサド・マゾ的、支配・被支配の関係になっている。それは、肛門期的関係であり、成熟した恋愛関係とは言い難い状況にある。そこでアスカは全く食事も摂ろうとしないシンジ(現実を受け入れられない象徴でもある)に郷を煮やし、強引にレーションをシンジの口に押し込もうとする。そこでシンジはケンスケの家を飛び出したが、その行動は、この歪んだ関係が続き、アスカ対等な関係になれないと感じ、咄嗟に起こした行動と思われる。

ここでアスカは「どうせやることなすこと裏目に出て、取り返しがつかなくなって、全部自分のせいだから、もう何もしたくないってだけでしょ。」と言っているが、それはアスカ自身がシンジの気持ちを受け止めきれないという表明であるように感じられる。シンジはケンスケをはじめ、周囲の方々に見守られながら、見えないながらも徐々に心が育まれているように感じられる。

3. 綾波は市井の人々との関わりの中でどの様に変ったか？

シンジの心は育まれていると感じられることを象徴しているのが、綾波が（そっくりさん）が市井の人々との関わりである。市井の人々との交流を通じて、彼女は今までとは違った、新しいものを取り入れている。綾波をシンジの写し鏡と捉えたとき、綾波の変化はシンジの心の変化を表しており、綾波が人との交流を通じて、主体性を確立していった様に、再建の段階にシンジの心は進みつつあるのではないか？と考えられる。

（つまり悲哀の過程の④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める））

その具体例…

1) 委員長（ヒカリ）が授乳をしているところで、綾波が色々尋ね、自分には授乳ができないことを知り困惑するシーン

綾波：違って、いいの？

2) 畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン 1

「風呂って不思議。L C Lと違って、ポカポカする」

「私、命令がないのに生きてる。なぜ?」

3) 親子が、手を取り合う姿を見て綾波が問うシーン

綾波：あれは、なに？

委員長：そうね、仲良くなるためのおまじない

そう言うと委員長はそっと右手を差し出し、綾波は右手を、そこに重ねる。

4) 畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン 2

綾波：名前、付けていいの?

綾波は周囲の人たちとの関わりの中で、誰かの指示で動いているのではなく、自ら感じ、自らが人と交流し、その温もりを感じ、自分という主体性を持つことに大切さ、そしてその喜びを感じ始めている。→前回の豆大福さんのメッセージを

想起。

4. シンジの心は綾波との交流の中でどう変化していったのか？

1) まず、綾波とシンジの対話

綾波：碇君はなぜ、村に戻らないの？

綾波：碇君も、ここで何もしてない。あなたもこの村を守る人なの？

シンジは微動だにせず膝を抱えて座っている。そしてなにか今まで貯めていた思いを吐き出すかの様に激しい口調でいう。

シンジ：守ってなんかいない。何もかも僕が壊したんだ。もう何もしたくない。

話もしたくないんだ。もう誰も来ないでよ！ 僕なんか、放っておいてほしいの

に！

シンジ：なんでみんな、こんなに優しいんだよ

綾波：碓君が好きだから

シンジは、はっと息を吞んで綾波の方へ振り返る。

綾波：ありがとう。話をしてくれて。これ、仲良くなるための、おまじない

綾波はシンジを見つめ、そっと右手を差し出す。シンジは堪えきれずに、嗚咽して泣き出す。

【考察】

ここは心が成長した綾波がシンジを包み込んでいる。シン・エヴァではシンジ

を取り巻く人々は、皆、彼に対して温かく優しく接している。しかしエヴァ序から周囲に対して迫害的に捉え、周囲を滅茶苦茶にってしまったと感じているシンジにとってこの優しさは信じられず、疑心暗鬼な状況であったと考えられる。

「誰も来ないでよ」「放っておいてほしい」と強く言ったシンジだが、これ以上傷つきたくないからこそ放った言葉であったと考えられる。

一方で受け止めてもらいたい思いもある様に感じられる。だからこそ綾波の言葉「碇君が好きだから」「ありがとう。話をしてくれて。」という言葉は非常にシンジの心を揺さぶったのではないだろうか？

→シンジは心を閉ざすことをやめ、トウジやケンスケが暮らす生活に入り込んでいった。それはシンジが現実世界を受け入れはじめていく。

3) 綾波の喪失

綾波：おはよう

シンジ：おはよう。どうしたの、こんな朝早く

綾波：碇君に会いたかった

シンジ：これ

黒い音楽プレイヤーをシンジに差し出した。

シンジ：あ、ありがとう

シンジ：あの、頼まれていた名前なんだけど——綾波は綾波だ。他に思いつかない

綾波：ありがとう。名前、考えてくれて。それだけで嬉しい。ここじゃ生きられない。けど、ここが好き

シンジ：綾波？

綾波：好きって分かった。うれしい

シンジ：綾波、どうしたの？

綾波：稲刈り、やってみたかった

綾波：ツバメ、もっと抱っこしたかった

綾波：好きな人と、ずっと一緒にいたかった

綾波：さよなら

シンジ：綾波！

別れの言葉の直後、レイは息を引き取るように瞳を閉じ、綾波は爆発し、そこには LCL に濡れたプラグスーツのみがあり、シンジはそのプラグスーツを抱いて静かに泣き出す。

【考察】

非常に残酷で切ないシーンに感じられるが、一方で母子分離、そしてシンジ自身が様々な喪失を受け入れる様になった象徴の様に感じられる。これまで綾波はシンジにとって母代わりの存在であり、心の支えであった様に感じられる。エヴァの破の最後でシンジは綾波の喪失を受け入れられず、ニアサードインパクトを引き起こし、その後も Q でシンジの心は彷徨い続けていた。そしてシン・エヴァで周囲の人々に抱えられるなかでシンジの心は成熟し、悲哀の心理過程の④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）に移行したと考えら

れる。

音楽プレイヤーは綾波の面影であり、現実に向かうための移行対象の様に感じられる。

そしてシンジ自身はエディプス葛藤に対峙するために再びエヴァに乗る決意を固める。

5. ヴインダーに乗り込んだシンジは以前に比べてどの様変わったのか？

シンジはアスカに気絶させられ、目覚めたときは Q でシンジが目覚めたときの様に担当医務官の鈴原サクラが彼の様子を覗き込んだ。その後、「勝手に出て行って、あんだけ乗らんといてゆうとったエヴァに乗りくさって、アホ！ アホ！ 碓さんのドアホ！」という様に、一方的にまくし立てる言いながら、途中感極まり、シンジの胸にすがって泣き伏す。その様子は、Q の様な恐怖とも怯えともつかない様子とは違っており、アスカに「女房か、あんたは」と呆れて言われた様に、サクラはシンジに対して愛憎まみえる心情を抱いていた様に感じ

られる。

このサクラのシンジへの関わりが象徴的だが、ヴィンダーの乗組員はミドリ
の様にあからさまに彼に対して憎しみを抱いている人もいる一方である程度シ
ンジの存在を受け入れつつある様に感じられる。

そのやりとりをいくつかとりあげてみる。

1) ヴィンダーでアスカがマリへの再会のシーン

マリ「By the way, ワンコ君との進捗どうだったん？」

アスカ「べつに、興味ない」

マリ「ほう。年頃の男の子は眼中にないと」

携帯ゲームをしながら、アスカは突き放すように言う。

アスカ「ガキに必要なのは恋人じゃない。母親よ」

【考察】

これまで、この番組でシンジが現実を受け止め、心の成熟を進めていくには、生きていくにはシンジの心を受け止めていく母親の様な存在が必要であるという事を何度か述べてきたが、アスカはそのことを話している様に感じられる。

そしてマリの問いにアスカは戸惑い、強がっているが、自分はシンジの心を母親の様にきちんと受け止められなかったと話している様にも感じられる。

そしてそこが、この3)の戦闘配備前にアスカがシンジに会いに行くシーンにつながってくるものと考えられる。

2) 母の様な存在、それはミサトを初めとしたヴィンダーの人々がシンジの心を受け止めていくことが必要不可欠と考えられる。

そこでリツコとミサトのやりとりを取り上げる。

カジが残した保存した種を保管する倉庫でのリツコとミサトのやり取り

リツコ「――で、葛城艦長。仮称、碇シンジ君は、どうするの？ 息子と同じく、一生会わない気？」

ミサト「艦内保護で十分。私が面会する必要はないわ」

リッコ「DSS チョーカー、未装着のままでもいいのね？」

ミサト「罪は自分の意志で償おうとしなければ、贖罪の意味がない」

リッコ「ミサト、そうして格好つけてても、本心では戻ってきてくれたって喜んでるでしょ」

【考察】

ここで、ミサトはシンジに対してツレない対応をとっている。しかしこのやりとりを Q のリッコの発言と対比していくと興味深い。

リッコは DSS チョーカーに関して「私たちへの保険。覚醒回避のための物理的安全装置。私たちの不信と、あなたへの罰の象徴です。」と言っているが、ここでは不信・罰の象徴の DSS チョーカーを未装着のままの状況をリッコもミサトも受け入れている。それだけ二人ともシンジを受け入れようとする心性に変わっている。そしてミサトの「罪は自分の意志で償おうとしなければ、贖罪の意味がない」という言葉は、何か突き放した言い方ではあるが、シンジが妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行という心の成熟を陰ながら見守ろうと

いう思いに他ならない。だからこそ最後のリツコの言葉が生きてくるのだと思う。

エヴァ劇場版・破において、スイカ畑でカジとシンジは次の様なやりとりをしている。

シンジ「これ確か……スイカですよ」

カジ「ああ。かわいいだろ？俺の趣味さ。何かを作る、何かを育てるってのはいいぞ。色んなことが見えるし、分かってくる。楽しいこととかな」

シンジ「辛い……こともでしょ」

カジ「辛いのはキライか？」

シンジ「好きじゃないです」

カジ「楽しいこと、見つけたかい？」

シンジ「……」

カジ「それもいいさ。けど、辛いことを知ってる人間の方が、それだけ人に優しくできる。それは弱さとは違うからな」

→カジはここで色々な情緒に向き合い受け止めていくことの大切さを伝えてい
る。

3) 戦闘配置のためにアスカとマリがエヴァに乗り込む前にシンジに会いに行
ったシーン。アスカは「ここは無垢の下ろし立てでしょ。死に装束なもの」と話
していた様に戦闘で亡くなってしれないということで、最後に大切な人に会っ
ておきたいと思いシンジに会ったのだと考えられる。

アスカ「最後だから聞いておく。私があんたを殴ろうとした訳、分かった？」

シンジ「アスカが、3号機に乗っていた時、僕が何も決めなかったから。助ける
ことも、殺すことも。自分で責任、負いたくなかったから」

アスカ「ちっとは成長したってわけね」

シンジ「最後だから言っておく。いつか食べたあんたの弁当、おいしかった。あのころはシンジのこと好きだったんだと思う。でも、私が先に大人になっちゃった。じゃ」

【考察】

このシーンではシンジの心の成熟が認められる。自身がその時なぜそうしてしまったのか？そしてその行動によってアスカを如何に傷つけてしまったのか？ということを理解している。それはシンジが抑うつポジションになり、現実を受け入れてきたからこそ発せられる言葉だと感じられる。

そしてアスカも成熟している様に感じる。最後のアスカの言葉で「大人になっちゃった。」という言葉は、シンジ・綾波（もういなくなってしまったが）との強い結びつきからの断念であり、それはエディプス葛藤を受け入れ（断念）、新たな道へ進もうとするアスカの心性が描かれている様に感じられる。そしてアスカのこの言葉はシンジへの別れの言葉でもあるが、なにか今までの強がっていたアスカとは異なり、寂寥（せきりょう）の念が感じられる。

だからこそ、その後、マリはシンジに対して

マリ「よっ。君はよくやってる。偉いよ。碇シンジ君」

と言い、

アスカには

マリ「姫、ちっとはすっきりした？」と言い

アスカ「そうね。すっきりした」と返した様に見える。

Thrice Upon a Time

シンエヴァンゲリオン 劇場版のサブタイトルであるが、何度も時間が経過したことを示唆し、この表現は、時間の経過や物語の進展を強調する際に使用される。

「未来からのホットライン」という映画、反復強迫

→シンジを含め周囲の人々が抑うつポジションになり、反復強迫から抜け出し、

新しい世界を切り拓いてく心性を表しているようにも感じられる。

(thrice (三度) というのがエディプス葛藤を彷彿とさせる)

ここヴァインダーの乗組員はシンジ、アスカ、ミサトをはじめ、多くの人たちの心の成熟（抑うつポジションへの移行）が起きている様に感じられる。

そして父と対峙し、倒し乗り越える様ためにヴァインダーの乗組員はネルフ本部にヤマト作戦を行い、総攻撃をしかける。